

俳句の普及による価値観の変化

井 尻 香 代 子

要 旨

本稿では、二つの視点から日本の俳句および海外のハイクが広範な普及を実現した原因を探る。第一に、その詩型の短さが意味するものに着目する。俳句は西欧近代文学の影響下に誕生したが、究極の短詩形であることによって、俳諧連歌の発句としての特徴を維持した。それは、創作方法における共同体的な集団性であり、これによって俳句は近代文学における個人主義の価値観を変革するジャンルとなったのである。第二に、日本の俳句の成立と世界への伝播の過程を環境史とエコクリティシズムの視点から検討する。日本の伝統詩歌はその発展のプロセスにおいて、日本列島という限られた領土における自然と人の関わりを破綻に幾度か直面した。そのたびに自然観および言語を更新し、連歌、俳諧連歌、俳句という新しいジャンルを生み出したのである。俳句の形式や言語には、そうした自然観の枠組みの変遷が刻み込まれている。欧米におけるハイクの受容は環境思想やエコロジーへの関心とリンクして進展した。多言語で制作されるハイクには、各地域の生物文化の多様性を守り共生しようとする価値観が共有されている。

キーワード：俳句の普及、価値観の変化、集団型ジャンル、環境史、エコクリティシズム

はじめに

俳句は明治初期の誕生以来今日まで、日本国内では国民文芸として実作人口数百万人ともいわれるほど親しまれる一方、作品としての質が常に問題とされてきた。現在国内には俳句結社を束ねる組織として、俳人協会、現代俳句協会、日本伝統俳句協会があるが、各協会の公認する俳句の定義については有季定型から無季自由律まで幅広く、統一されていない。また海外では70カ国以上に普及し、各国の言語で制作されているが、「ハイクとは何か」というジャンルの本質をめぐる定義には諸論あり、必ずしも定まっていないのが現状である¹⁾。

このように国内外に広く普及し、俳句・ハイクという名のもとに実作、鑑賞されているこの定型詩はどのように同定されているのだろうか。国内の俳句については同じ詩型の川柳との差異が常に問われ、他言語のハイクにおいてはこのジャンルをめぐる実作者間の議論が続いている。また、日本の俳句と海外のハイクは別の詩的ジャンルと考えるべきなのだろうか。使用言語によって韻律が変化し、地域によって自然環境も季節を表す言葉も異なることは自明である。このことを前提としたうえで、俳句・ハイクとは「人と自然との関わりを対象とした短詩」であるとする立場もしばしば見られるが、これだけではきわめて曖昧な印象をぬぐえない²⁾。また、この短詩型がわずか一世紀の間に国境を越えて多くの地域、言語の人々に受容された理

由も十分に説明できないと思われる。

そこで本稿では、次の二つの視点から俳句・ハイクが国内外に広範な普及を実現した要因を探りたい。第一に、その詩型の短さが意味するものに着目する。世界最小の詩的形式である俳句・ハイクは、実作と鑑賞の両方において近づきやすく大きなインパクトをもたらすが、それだけで多くの人々が制作を試み、継続していく動機になるとは考えにくい。ここには発句が、日本の詩歌の伝統において形成され、欧米をはじめとする他地域の文化に出会い、俳諧から独立してつくられるようになった後も保持し続けた特質が関わっていると思われる。俳句が実は孤立した短詩ではなく、俳諧の連歌の発句としての伝統に支えられて誕生し、作者は、共作者であり読者である連衆れんじゅうの存在を想定しているという事実が、今日もなおこの短詩型を規定しているのではないだろうか。第二に、日本の俳句の成立と世界への伝播の過程を環境史とエコクリティシズム（環境批評）の視点から検討してみたい。日本の和歌がどのように自然と関わり、連歌の式目を形成し、俳句の成立に至ったかを中世から近代の自然・社会環境の変化に照らして見直し、次に欧米社会が19世紀末から今世紀にかけて日本の詩歌を受容していった過程を、同時期に経験した急激な環境変動とそれにとまなう自然観の転換とあわせて検討したい。以上二つの視点からの検討によって、国内での俳句、他言語でのハイクがそれぞれの地域や文化において盛んに制作されるようになったプロセスに、これまでとは違った角度から光を当てることができるだろう。そのプロセスは現代社会を生きる人々が選びとった価値観の変化にかかわっており、なぜ今俳句・ハイクが広く読まれ、作られているかを解き明かすひとつの方法を提示することができるものと考えられる。

筆者はこれまで、海外のハイクの中でも、ハイクの制作および研究活動が質量ともに高いレベルにあるアルゼンチンのスペイン語ハイク生成過程に着目し、アルゼンチンにおける日本の詩歌の受容、スペイン語ハイクの季語および韻律の特徴について調査を進めてきた³⁾。本稿では上記の価値観の変化がアルゼンチンの詩人によるハイク制作活動の中にどのように現れているかを分析・検証してまとめたい。

1. 俳句・ハイクの詩型が意味するもの

1.1. 西欧近代詩と俳句

周知のように、正岡子規は俳諧の発句を独立させることにより、「俳句」を創始した。明治28年に『芭蕉雑談』の中で「発句は文学なり、連俳は文学にあらず、(中略)連俳固より文学の分子を有せざるに非ずといえども文学以外の分子をも併有するなり。而して其の文学の分子のみを論ぜんには発句を以て足れりとなす。」と述べている(正岡2002:35)。また『俳諧大要』では「俳句は文学の一部なり。文学は美術の一部なり。故に美の標準は文学の標準なり。文学

の標準は俳句の標準なり。」と断言し（正岡 1983：6）、5音7音5音のみで成立する俳句を文学作品として確立しようとする強い意志を示している。

俳諧の発句はそれまで、発句集等の中で単独に鑑賞されることはあったとはいえ、子規が発句を一卷の平句から切り離して制作・鑑賞することを主導し、連衆による俳諧の連歌（連俳）を文学ではなく知的な遊戯にすぎないとして全面的な否定に踏み切った原因は、どこにあったのだろうか。明治初期の西欧文化との接触にあたって、子規は和歌や俳諧といった日本の伝統詩歌の将来に強い危機感を抱き、西欧の価値観を取り込むことによってこれらの短詩型文学の存続を図ったと考えられる。コロンビア大学の日本文学研究者ハルオ・シラネは、写生を重んじ、俳句を個人の作品とした子規について、「この点において彼は、西欧の文学と詩に関する二つの観念に深く影響されていた。まず文学はリアリズムであるべきこと、そして文学は個人の表現であるべきことである。」と指摘し、たとえ子規がいなかったとしても19世紀末の圧倒的な西欧文化の影響は同じ効果を生んだであろうと述べている（シラネ 2000）。

しかし、このように日本の伝統詩歌と西欧文学・思想との接触によって生まれた俳句は、西欧的な意味での近代詩となったのだろうか。ここで注目したいのは、日本の伝統詩歌の創作方法である。天満尚仁は日本文学における主体性を論じて次のように述べている。

日本の文学の伝統性を考える時、まず浮かぶのは和歌である。（中略）この和歌を考えるにあたって重要なのは、そのリズムや作品世界ではなくその独特な創作方法である。贈答歌に顕著なように、和歌は他者を根源的な構成要素としている。（中略）俳諧は連衆という複数化された作家をとめない、開かれた場の中で一つの作品が作り上げられる。そして、それぞれの歌がそれだけで表現としての世界を構築しながらも、前後に続く歌に対してゆるやかに関係付けられている。つまり、俳諧は作者と他者の二重性を生成過程とした文芸様式なのである（天満：100）。

和歌、連歌、俳諧を通じて受け継がれた日本的な主体による創作方法は、俳句の成立とともに変化したのだろうか。

1.2. 俳句・ハイクの創作方法

現在の俳句結社の活動の基礎が「句会」にあることはよく知られている。『現代俳句大事典』は、「句会」を「複数の人が自作の俳句を提出し、互選によって評価しあったり、指導者の選を受けたりする集まり。成績を競い、選者の指導を受けたり、相互批評を行う等、鍛錬の場でもある。」と規定し、その歴史は連句（俳諧の連歌）に始まったもので、蕪村の時代の競争的な発句合や互選をする運座を取り入れて明治24年に現在の形に整えられ、翌年正岡子規が日

本派句会の慣例とした、と解説している（稲畑：196）。つまり俳句は、子規の時代から今日まで17字の短詩を個人の作品として規定しながらも、創作方法においては伝統詩歌のあり方を継承しているのである。

東京の米国大使館に外交官として二度駐在し、黒田杏子主催の句会に参加していたアビゲール・フリードマンは「俳句のグループ」に初めて出席したときの経験を次のように述べている。「私はそれまで、俳句、あるいはどの種類の詩であろうと、それを社会的活動と考えたことはなかった。森の中で俳句をつくる禅の僧侶のイメージがあって、人は内なる自分を見出すために俳句をつくるのだと思いこんでいた。それなのにここにいる潮音（同人の一人：筆者注）は、他の人々と結びつくものとして俳句に魅せられているという。」（フリードマン：27）彼女はその後、「先生」の指導や他の参加者のアドバイスを受けながら句作する方法を身につけていくのである。

このような句会運営を可能にするのは、何よりもまず、作品の短さである。「出句」、「清記」、「選句」、「披講と名乗り」、「講評」と続く句会のプロセスは通常2時間から4時間ほどで終了する。参加者が集まりやすい半日程度の枠の中で、20～30人がひとり5句程度出す作品を全員で共有するためには17字の句は最適のサイズである。そして既に述べたように、俳句の句会運営方法の起源は連句会にある。複数の連衆で句を出し合い、一卷を巻き上げる作品形態の代わりに、個々で完結した作品を参加者全員で読み、評価する点が異なるだけである。どちらにも全体を総括する「主宰」（俳句）または「捌」（連句）が存在し、構成員全員が作者であり読者であることを前提としている。俳句の短詩型には、七五調のリズムだけではなく、伝統詩の創作方法、ひいては独特の創作主体のあり方が反映されており、個人から他者に向けて開かれた形式となっているのである。

では、海外のハイクの場合はどうだろうか。筆者は2009年から2012年にかけてアルゼンチンのハイク制作状況を調査した。現在アルゼンチンでは首都ブエノスアイレスを中心に個人のハイク詩集や研究書がこれまで50冊以上出版されており、いくつかの「ハイク・グループ」が定期的な会合を開いているが、そのうち主要な2グループの創作方法を以下に取り上げる。

まずブエノスアイレスの「東西学院⁴⁾」の例を見てみよう。1996年に、ネリ・L・メンディアアラが指導するハイク会が発足した。メンディアアラは、フランス・バスク系で、ブエノスアイレスで音楽（作曲）を、パリで東洋文学を学んだ。タンカ集2冊（Mendiara 2001, 2006）とハイク集3冊（Mendiara 1998, 2000, 2008）を出版しており、彼女の作品は国内の新聞、雑誌のみならず、日本国際俳句交流協会『HI』や*Haiku World*（Higginson1996:152）にも掲載されている。ブエノスアイレスをはじめ、メンドサ、サンルイスなどの図書館や学校の文学関連行事に招かれて日本の詩歌に関する講演やワークショップを行い、スペイン語ハイクの普及活動を進めている。ハイク会では、俳諧の山崎宗鑑から現代俳句の作者までの作品を松尾芭蕉、小林一茶、正岡子規等を中心にとどった後、スペイン語詩法（韻律・修辞）を学んで実作に移

る。このハイク会は、常に数名から10名までの少人数であり、各自が持ち寄った作品についての活発な意見交換のあと、メンディアラの指導がなされる。

次に「西部日本人会⁵⁾」の場合はどうだろうか。1997年からタンカ、ハイク、センリュウ会がリリア・ミヤカワの指導のもとで発足した。ミヤカワは父が日本人、母がアイルランド系の日系2世である。この会では毎月第3土曜日の午後、15人から20人の参加者が自作の数句を持って集まり順次披露する。次に個々の作品に対して、主宰のミヤカワをはじめ、構成員全員が互いに批評しながら作品を完成していくというプロセスをとり、ワークショップのような形で制作が進められる。これまで4冊のセイブ・グループ・アンソロジーを出版している(Miyakawa et al 1998-2007)。

いずれの会でも、まず日本の伝統詩歌についての講義や俳諧、俳句作品の講読を通じてジャンルの概要を学んだあと、主宰を交えた句会が行われている⁶⁾。日本の結社の句会とは進行方法が異なるが、参加者の持参した作品が完成し閉じられたものではなく、読み手(聴き手)の存在を構成要素とした作者グループによって作られていく点は共通している。この創作方法を可能にしているのは、集団の中で朗読され、理解されることが可能な「短さ」であり、そこには短い単位の詩歌を他者との間でやり取りしてきた、和歌から俳諧までの多くの作品のエコーが響いているのである。

1.3. 参加型ジャンルとしての俳句・ハイク

シラネは日本の文学活動について「きわめて共同体的(communal)で参加型(相互作用的)であり、定型ならびにカノンのテキスト⁷⁾からの引用や間テキスト性⁸⁾に、大きく依存している」と述べ、こうした共同体的過程(ふつう生徒-教師の関係にもとづいている)は、読者の受容(readerly reception)に対し作者的受容(writerly reception)と呼ぶべきものを生んできたことを指摘している。読者の受容においては、テキストは主として読まれ、解釈されるものとして消費されるのに対し、作者的受容では文体や語彙、創作のヒントが求められるのである。シラネはこの典型例として詩的ジャンルを挙げ、「和歌や連歌、俳諧、狂歌などはいずれも参加型の、集団型ジャンル(「座の文学」)であって、そこでは生産者が消費者であり、消費者が生産者なのである」と述べている(シラネ2009:19)。

俳句・ハイクは、西欧の個人主義の影響下、近代詩として再出発した。しかし、究極の短詩型という韻律の特徴が内包する参加型ジャンルとしての伝統が、和歌から現代作家達にいたる作品の翻訳・普及によって促進された結果、読者の受容のみが許される近代詩の枠組みからはみ出す詩的ジャンル、つまり作者的受容を可能にするジャンルとして国内外に作者/読者を獲得していったのである。

2. 環境史から見た俳句の成立と普及

2.1. 日本人は自然と共生してきたか

日本人はしばしば自ら「日本人は自然と共生してきた」と信じ、19世紀末に初めて日本文化と接触した西欧の知識人たちも日本文化の特徴としてこうした言説を繰り返してきた。日本の伝統詩歌は「自然と人の関わり」の詩であり、文化の根底には自然崇拜やアニミズムがあるという考え方が根強く存在する。しかし日本人は「環境史」の視点から眺めたとき、本当に自然と共生する社会や文化を育ててきたのだろうか。環境史とは「人から自然へのはたらきかけだけでなく、自然から人にはたらきかける恵みや災い等の要因を意識して、人と自然がどのような関わりをもつてともに歩んできたのかを描写した歴史（湯本：28）」であり、そこには多様な環境条件、惑星としての地球の歴史に関わる要因、人間が狩猟採集、農耕、牧畜、林業等によって持続的におこなってきた生物資源の利用などが考慮される。実際には日本列島の過去の人々は常に豊かな自然と調和して生きてきたわけではなく、幾度かの大規模な破綻と新たな関わり方の変換がおこなわれてきたことが知られている。

このような自然環境を日本の詩歌はどのように表象してきたのだろうか。第2節以降では、文学における自然環境の問題に焦点を当てる批評理論であるエコクリティシズムの議論も参照しつつ、伝統詩歌が自然を対象とする表象性の枠組みを問い直してみたい。その上で、欧米近代文学に表れた自然観の変化と19世紀末以降の日本文化受容の関係を再検討することによって、近現代にわたる俳句の国内外の普及の要因を明らかにしていきたい。

2.2. 伝統詩歌の成立と「自然」

まず日本の和歌がどのように自然と関わり、連歌の式目を形成し、俳句の成立に至ったかを古代から近代の自然・社会環境の変化に照らして検討しよう。5音句と7音句の組み合わせを基本とする定型詩である和歌は7世紀の前半、舒明天皇の時代に成立したと考えられる⁹⁾。その後『古今和歌集』（913年頃）が成立し、次々と勅撰和歌集が編纂されていった平安時代末期までの日本（畿内）の環境はどのようなようであっただろうか。

辻野亮は、日本列島での自然と人の関わりを、自然利用の大きな位置を占めてきた森林利用、狩猟と獣害、草と草原の利用に注目して概観している（辻野：33～51）。この時期、仏教の伝来とアジア大陸からの大規模な木造建築の技術導入にともない、法隆寺や東大寺などの建築ブームが起き、藤原京から平安京までの相次ぐ遷都によって膨大な木材が切り出され、略奪的な濫伐による森林破壊や水害が起こると同時に、壱田永年私財法（743）等によって農地開墾が進んだ。一方、天皇の鷹狩や大規模な巻狩が行われ、平安期に拡大した荘園では鹿や猿などによる獣害が起こっていた。こうした自然利用によって大和盆地周辺の環境、すなわち人々の目に映る都の周辺の「自然」は刻々と変化していったものと思われる。

では、和歌はどのように人と自然のかかわりを表現したのだろうか。シラネによれば、東アジアの伝統において、詩歌は(1)「情」(感情や思考)の直接表現、(2)「景」の直接描写、(3)「景」のイメージやシーンを通して「情」を表現すること、のいずれかを求められた。平安時代の宮廷和歌において「情」は間接的に、優雅に表現されることが好まれたために、風景の描写の中に感情や思考を表現した第三の技法が多く用いられた。こうして高度にコード化され、多義性をもつ「和歌言語」が形成されたのである。例としてシラネは、「題詠」の中核をなす「本意」を挙げる。雨は種類や季節によって異なる連想を導き出すが、春雨は静かな細かな雨を、五月雨は梅雨の長雨を、時雨は初冬の断続的な雨を意味すると同時に、春雨は甘美な思いと、五月雨は憂鬱と、時雨は儚さと結びつく。これらが共有の語彙や言語となり、自然、四季、恋愛、死やその他の人生の局面に対する共同体の視点を形作ったのであり、歌題やその連想は共同体において共有された想像力であると結論付けている(シラネ 2012: 4-8)。

その一方で、「和歌言語」は勅撰和歌集や歌論集によって整えられた「四季のイデオロギー」であると考えられる点にも注目しておきたい¹⁰⁾。シラネは特にエコクリティシズムの文脈において、勅撰和歌集はその権威によって春に始まり冬に終わる四季の詩的なサイクルを定着させ、社会階層上の権力関係を強化するために重要な役割を果たしたとして次のような指摘をしている。

時間と空間、——つまり、「天の下の」自然と人間、天と地——が宮廷の周りに秩序だって配置され、和歌を通して調和が保たれているという幻想を作り出した。この見方は、少なくとも部分的には、秩序正しい季節の循環は皇帝の治世のありようを直接映し出しているとみなした中国の長い伝統からくるものである(シラネ 2012: 6)。

つまり、大規模な森林の伐採を行い、続々と寺や都を建造した朝廷は、その結果引き起こされた自然との関係の破綻である水害や獣害などをコントロールし、四季の循環、天象、山河や荘園に広がる新たな生態系に対し、それらを和歌言語という記号によって体系化し、連想の体系を作り上げることによって、自然とのかかわりの再構築を試みたと考えられる。

これらの和歌言語は、南北朝時代の連歌式目の制定によって一層完成されるが、室町時代の俳諧の連歌の開始によって大きな転換が生じる。さらに近世前・中期の芭蕉の改革をもって洗練され、豊かなコーパスを形成する。

2.3. 連歌—連句の言語と「自然」

次に連歌—連句の時代に焦点を当てよう。平安時代、連歌は問答唱和による長短2句の短歌制作から、3句以上の鎖連歌(長連歌)への展開が主流となり、次第に式目と呼ばれる諸規則が整えられていく。南北朝時代には二条良基によって『連歌新式』が完成され、準勅撰集と

された最初の連歌撰集『菟玖波集』（1356 頃）が生まれたことにより「有心連歌」が芸術詩として確立したといわれる。室町時代には俳諧連歌が盛んになり、江戸時代に完成する。では、室町時代から近世中期の人々の環境はどのようなものだったのだろうか。

室町時代に始まった戦乱においては戦略的に森林が伐採され、鋸等の道具や木材輸送の技術が発達したために木材消費が促進された。織豊時代には巨大な城や城下町、京都の聚楽第や比叡山の寺院群の建設、社寺の再建のため未曾有の規模で木材消費が拡大し、広域の原生林で木材が伐採された。さらに江戸時代になって平和が訪れると、人口は急速に増加し、都市、城郭、寺院の建設が一気に増える。また城砦建築によって培われた土木技術が開拓や干拓に転用され、これまで利用されなかった森林、平野部、湿地を水田に変えていった。近世前期の略奪林業による森林破壊は猛烈な勢いで広がり、18世紀初頭までには、本州、四国、九州、北海道南部の森林のうち、当時の技術で伐採できる森林はほとんど失われた（辻野：37～38）。その結果、台風被害の激化、河川氾濫、土壌浸食が起り、保安的林業（育成林業）への転換が徐々に行われる。また、室町時代後期には鉄砲の伝来があり、干拓・開拓によって耕地が拡大した17世紀末からは野生動物と農民の衝突が増え、害鳥獣駆除や狩猟に鉄砲が大量に備蓄されていたのである。この時期、対馬では大規模な駆除による猪の殲滅が起っている（辻野：42）。18世紀になると、各地で植林政策が展開され山林の管理体制が整ったが、人口が増えるのと田畑の面積も増え、草肥や牛馬飼育のための草地の維持も必要であった。過剰な森林伐採の結果、都市や村落の周辺には禿山や草山が広がっていたのである。

和歌から連歌が新しいジャンルとして独立した時期は、社会的混乱が著しく、森林資源利用が飛躍的に拡大した。そうした環境の中で連歌は、自然を記号化した和歌言語が含む素材を分類し、百句からなる構成の中に停滞や繰り返しが起らないよう規則を整えて、和歌が形成してきた「二次的自然」¹¹⁾の世界を完成したのである。連歌作品の最高峰とされる『水無瀬三吟』（1488）は応仁の乱後の荒廃した京都の郊外で制作され、様々な場景が豊かな連想へと読者を導き、過去の秀句への言及が伝統への結びつきを感じさせる趣深い一巻となっている。

しかし優雅な貴族社会は既に失われ、環境変化のスピードは高まり、自然を認識し表象する言語にも変化が現れ始める。和歌は上品な主題と歌語によって構成されなければならなかったもので、非正統的な内容、すなわち縁起の悪い事物や卑俗な語、言葉遊び、滑稽さは和歌にも連歌にも用いられなかった。しかし室町時代には、山崎宗鑑が先駆的な俳諧撰集『新撰犬筑波集』を編み、新しい言語が用いられ始める。

俳諧連歌は連歌の雅語に加えて俗語を導入し、貞門、談林の時代には、作者としてそれまでの貴族、武士、僧侶にとどまらず、大都市の商人、職人や地方の農民までも参入していく。カノン（正典、規範）化されたテキストであった勅撰集の権威ある言語（国語化された漢語、和語）に民衆の言語（俗語）が混用されて、古典の模倣やパロディー化が始まったのである。また、連歌の式目において整然と組み上げられていた歌題、歌語の曼荼羅体系は、簡略化された

上で、庶民の素朴な日常に用いられる新しい語彙によって拡充された。『連歌新式』において想定されていた百韻による精緻な構造は、俳諧連歌においてはより短く柔軟性のある諸形式にとって代われ、芭蕉の時代には三十六韻による「歌仙」が主流となっていた。歌仙においては、連歌では避けられた「殺伐なこと」、「病態」、「妖怪」等を表現する様々な語彙も、表六句以外では許容されるようになった。こうして俳諧における「二次的自然」は、和歌言語と俗語による二重構造となり、平易なものの中の優雅さ、世俗の中の聖性、現在の中の永遠を求める詩学が生み出されることとなった。

「近世の略奪」¹²⁾と呼ばれる時期に生きた日本人たちは環境の激変を前にして、自然観の変化を余儀なくされたと想像される。人間の側からの資源利用は、人口の増加と技術の向上によって日本列島という領土の中ではほぼ限界に達し、自然との新たなかかわりが模索されたに違いない。生態系の破綻と相次ぐ災害とは、人と自然の関係の「儂さ」や「変転」の相を実感させたのではないだろうか。『平家物語』（14世紀半ば第一巻校訂）や『徒然草』（1330年頃）に表れる無常観は江戸時代を通じて文化的な通底音となり、連歌から連句に連なる形式に「転じの詩学」として反映されている。芭蕉は「歌仙は三十六歩也。一步も後に帰る心なし」（『三冊子』）として、「三句のわたり」を重視した。前句と付句は一つのイメージや世界を構成するが、次句では転じなくてはならず、三句が一連の物語となることは「打越」、「輪廻」、「観音開き」として厳しく避けられたのである。

俳諧連歌は江戸時代をとおして、和歌言語と俗語の二重構造による自然表象を試み、「転じの詩学」によって変化の相における自然観を紡ぎ続けた。しかし、明治開国によって再び日本の環境は大きく変化し、同時に日本の文化・思想は欧米のそれと接触して俳句が誕生することになる。

2.4. 欧米近代の環境と自然観の変化

そこで、まず欧米近代の環境とそれとともなう自然観の変化を概観し、次に明治の日本における環境と俳句の誕生・普及を見ていきたい。18世紀から19世紀にかけて起ったヨーロッパの産業革命は長期的持続性を持っていた農耕社会を大きく変えた。19世紀前半のディケンズの小説には、大気汚染をはじめ生活環境悪化の状況が驚くほど詳細に描き出されている¹³⁾。矢原徹一は産業革命以後の世界について「①経済成長と市場の拡大、②科学技術の発達、③人口増加、④グローバル化、等の変化が同時に進行した。」ことを指摘し、科学技術の発達と市場の拡大に促されて、農業の近代化、輸送手段の近代化、化学合成の工業化が進み、人間生活の生物多様性に基づく資源への依存度が大きく低下したと述べている（矢原：93）。森林を維持する技術はヨーロッパでも発展し、育林技術や、それに統合された形の牧畜技術が生み出されていたが、木材燃料から化石燃料への転換に支えられた産業革命は、農耕社会から近代産業社会へと、まずヨーロッパの環境を変化させたのである。こうした急激な変化への反動である

自然回帰思想の表れとして、ロマン主義を挙げることができる。W. ワーズワースはS. コールリッジとの共著『抒情民謡集』（1798）において自然への畏敬の念を表現し、自然と一体化した生活を賛美して、自然と人の関係について思想的な影響を与えた。ロマン主義の影響下、米国ではR.W. エマソンの『自然論』（1836）やH.D. ソローの『ウォールデン 森の生活』（1854）において、自然の中には「大霊（Oversoul）」が浸透しており、自然は人間と人間以外の生命体との共同体であるとする自然観が表明されている。一方、19世紀ドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルは、後に環境問題の歴史的潮流において重要となる「エコロジー」（生態学）という概念を考案した。松野弘は「『エコロジー』の本来的な意味は『生物と環境の相互関係を研究する生物学の一分野』ということになるが、この言葉が環境問題を考えていく上で、思想的な意味を持ってきたのは、産業革命以降の近代的産業社会の成立・発展とともに、天然資源としての自然環境が収奪・破壊され、そのことが社会問題となってきたからである。」と述べている（松野：11）。これらはいずれも、人間が自然を支配するというキリスト教的自然観に対する異議申し立てと考えられる。このような自然観の変容が欧米において起こった時期に、俳句は紹介され、受容されたことになる。

2.5. 近代日本の環境と俳句の成立・普及

ここで、近代日本における環境の変化と俳句の成立、欧米への普及について考えてみよう。江戸時代後期には製鉄・製塩・製炭などの産業が盛んになるにつれて、それらに必要な木材を得るための伐採が進み、幕末には全国的に禿山や草地が増えて洪水や土砂災害が起りやすくなった。明治になってからの殖産興業と富国強兵によって木材需要が増えたために、河川流送に加えて森林鉄道・軌道や林道が整備されて奥地林開発も展開された。その結果、大洪水災害が頻発したために、治山治水の必要性が唱えられ、治山三法が制定された（辻野：38-39）。また国産の元込銃普及に加え、日清戦争や日露戦争で必要となった防寒用のコートや帽子のためのも鹿や野兎などの毛皮需要が狩猟圧を高め、当然ながら野生哺乳類が減少、地域によっては絶滅することもあった（辻野：43）。

こうした近代のはじめに活躍した博物学者、南方熊楠は故郷、熊野の植生に強い関心を寄せて粘菌の研究に成果を残す一方、エコロジーの先覚者として明治政府による神社合祀に異を唱え、反対運動を展開した。熊楠が熊野に見ていたものについて、小峯和明は「聖地にかかわるさまざまな生きた伝承であった。聖地は実態的な空間や環境としてあるだけでなく、そこには有形、無形の伝説や伝承が覆いかぶさり、堆積している。（中略）長い歴史の時空間に重層化し輻輳しあった場として聖地はある。」（小峯：38）と述べている。ここには和歌言語が形成してきた二次的自然とは異なる、もう一つの二次的自然、すなわち「自然／文化の複合領域」（野田：35）としての「民間の自然観」が意識されていたものと思われる。

俳諧連歌は和歌言語に俗語を混用し、変化の相における自然観を形成したが、明治に入ると

南方熊楠や柳田國男らの民俗学に関わる著作によって主に農村の自然観に基づく「民間の自然観」がテキスト化されていく。同時に俳句が17字のみのジャンルとして独立し、形式的には式目から解き放たれて、読み書きができる日本人ならば誰でも制作できるようになるのである。しかし第1章で述べたように、俳句は創作方法において共同体的で参加型である伝統詩歌の性格を維持しており、和歌-連歌-俳諧をつうじて形成された言語には自然観の網が張り巡らされている。近代以降に成立した歳時記は、各季の季語を、時候、天文、地理、人事、植物、動物に分けて配列するものが多いが、そこには農耕、狩猟、漁労、地域行事まで、民間の伝承が反映されている。現代において俳句を詠むことは、社会と環境の変化のたびに更新されてきた自然観を現在の視点から確認する作業なのではないだろうか。

俳諧の発句は19世紀末の明治開国とともに、haikaiまたはhokkuとしてアメリカ、イギリス、フランス、スペイン、メキシコに紹介され、イギリスのイマジズム（写像主義）、フランスのジャポニスム（日本趣味、日本主義）、スペインやメキシコのモデルニスム（近代主義）に影響を与えた。芭蕉、蕪村、千代女、一茶、良寛等の発句に接した欧米の詩人たちは、上品な花鳥風月のみならず、草木や虫の「景」に仮託して「情」を歌った作品に、ロマン主義に通じる自然礼賛を見出したのではないだろうか。あるいは産業革命という大規模な環境の破綻に直面していた欧米社会とは異なる、自然と調和した理想社会を見出そうとしたのかもしれない。そこには圧倒的に優位であったヨーロッパ文明から見て、異質な自然観を持つ小国に対するオリエンタリズムもあっただろう。その後俳句が国内で普及を果たすと、太平洋戦争後にハイクの海外普及が本格的に始まる。米国では物質中心主義に反対するビートの詩人たちを中心に英語ハイクが広まり、1960年代から1970年代にかけて詩人のゲーリー・スナイダーは自らも英語ハイクを発表しつつ、日本の俳句や芭蕉の『奥の細道』を米国人も学ぶべきだという主張を展開する。同時期に出版されたレイチェル・カーソンの『沈黙の春』（1962）は環境に及ぼす農薬の影響について警告を発し、環境問題への関心を高める上で大きな役割を果たした。その後、スナイダーは環境問題に重心を移し、これからは人間と自然の双方に権利を認めてバランスを取らなければ地球が破壊されるという問題意識を提示していく。一方、英語ハイクを中心に多言語でのハイク制作は世界的に広まり、米国ハイク協会（1968）、カナダハイク協会（1977）、ドイツハイク協会（1988）、英国ハイク協会（1989）、クロアチアハイク協会（1992）が次々に登録されている。松野は「『環境思想』が伝統的な環境保護思想や環境保全思想（伝統的環境主義思想）から、環境問題のグローバル化に伴い、一般大衆が政治的志向性をもった社会運動型の環境運動（近代的環境主義思想）へと転換していったのは環境問題が先進諸国の共通の社会問題となっていく、1960年代以降といわれている。」（松野：24）と指摘し、もっとも現代的な環境思想とは「人間と自然との関係を生態系中心主義的（エコロジック）な視点から捉え、地球環境における人間と人間以外の生命体が生命共同体の一員として、共存・共生し、環境負荷をミニマムにした、〈緑の持続可能な社会〉をわれわれ人間が構築していくため

の知的装置である」と定義している（松野：32-33）。1960年代以降の国際的なハイク普及と環境思想の展開は、相互に関連するプロセスと考えるべきではないだろうか。

おわりに

以上、俳句の普及による価値観の変化について論じてきた。第1章では、俳句の定型の持つ機能を中心に世界的な普及の理由を探った。俳句は西欧のリアリズムと個人主義中心の文学観の影響下に、俳諧連歌から切り離された発句として出発したが、その創作方法は共同体的であり、参加型であり続けたのである。また詩歌にはもともと、即興的なパフォーマンスとしての側面と推敲されたテキストとしての側面が存在するが、俳句は短詩型文学としての利点から、パフォーマンスとして享受できる詩型として普及した。小学生から高齢者まで、サラリーマンから大統領まで、さまざまな立場の人々が制作し、享受することができるジャンルは現代詩の概念を変化させ、生活の中で詩を作り、味わう喜びを提供したのである。一方、パフォーマンスとしての機能はそれが作られたコンテキストに依存する部分が多いため、テキストとして鑑賞するには困難が生ずることが多い。国内外で俳句・ハイクの質の問題が問われる理由はここにある。しかし、歴史的にコンテキストを補うために添えられてきた詞書、散文との組み合わせ、グラフィックなものとの組み合わせもまた世界的に普及しつつあり、各地のハイク雑誌やハイク・サイトには俳文、俳画、俳句日記などが掲載されている。

アクニャとグリモッシは現代音楽の作曲家ジョン・ケージのハイクをめぐる言説を取り上げた「西欧におけるハイクの生成をめぐる多様な視点」において、「ケージの理解では、芸術の形態には直接的行為と間接的行為、つまり詩人の意図と読者の受容が存在し、これらの要素の接続は双方の働きかけによって生じる。¹⁴⁾」と述べ、芭蕉の句の多様な解釈の可能性を提示している（Tozai 2010：16）。またケージは、*Haiku* (1951)、*Renga* (1975-76)、および *Haikai* (1990) という3編の作曲を行っている。日本の伝統詩3ジャンルの音楽的パフォーマンス/テキストの実験例として挙げておきたい。このように俳句・ハイクの普及には、個人主義だけではなく、「文学」や「芸術」における〈作者/読者〉観の変化が関わっていると思われる。

第2章では環境史における変動と自然観の変容について論じた。連歌、俳諧連歌の生成は、いずれも日本列島の環境史において「古代の略奪」「近世の略奪」と呼ばれた時期に一致し、俳句・ハイクの成立と普及は国内外における近代産業社会の形成に呼応するように進展している。従来の自然と人間のかかわりが破綻をきたしたとき、人々の自然観にも揺らぎが生じる。支配的であった優美な和歌言語の体系は俗語による模倣やパロディを取りこんで変容し、都市や里山の生態系を取り入れて組み直された自然観を表象する俳諧言語となる。そして産業革命後、長期的持続性を維持していた自然と人の関わりは大きな変動を被り、この破綻を乗り越えるためには、人間を環境や生態系の支配者ではなく構成員と捉えるべきであるとする自然観が

広がっていく。日本では「民間の自然観」を歳時記に反映した俳句が生成し、欧米では環境思想やエコロジーとハイク制作がリンクして発展する。今日、俳句・ハイクを作ることは、環境の中の人や文化のあり方を探る試みと重なっているように思われる。

アクニャとグリモッシは、俳句のアルゼンチン化は作者の周囲にある文化や場所の多様なテーマを瞬間のうちに結晶化することであると論じ、首都ブエノスアイレスと北部アンデス山中の町サルタの環境を詠んだ作品を紹介している (Tozai 2012: 120)。

De humo y ruidos	スモッグと騒音で
Buenos Aires se enturbia	濁ったブエノスアイレス
pero hay magnolias.	でも木蓮が咲いている
Neri L. Mendiara	
En el corral	囲い場で
corriendo los cabritos	走る仔山羊たちと
y las estrellas.	星々
Cecilia Del Valle Tapia Perfrán	

二十一世紀を迎えた今日、地球環境問題は一層深刻化している。地球の温暖化は進行し、生物多様性の減少も危機的状況にある。限定された領土の中で幾度か人と自然の関わりの破綻を経験した日本では、自然観の揺らぎの中からかろうじて次の関わり方を模索してきた。伝統詩歌の形式や言語には、そうした自然観の枠組みの変遷が刻まれている。多言語で制作されるハイクには、「人と自然との関わりを対象とした短詩」というジャンルが育む、各地域の生物文化の多様性への深い関心が共有されているのである。

注

- 1) 井尻香代子「国際ハイクと季語」2012を参照。
- 2) 例えば、日本伝統俳句協会ホームページ〈私たちは〉では「私どもは日本古来からある伝統的なリズムを守る俳句、そして日本での人間と自然界の風物との脈々たる係り合いを詠う俳句、つまりは花鳥諷詠を基礎とした俳句を拠り所にし、そしてその中には人間界の営みも広く包含する新しく、しかも伝統的な俳句についての活動を目指しております。」と述べる一方で、〈俳句のお誘い〉においては「今や俳句はHAIKUとして世界のものになってきました。われわれは世界へ発信された自然との対話のある日本の小さな定型詩が人々の心のよりどころとなる日を夢見ているのです。」として、その定義を広げている。また、アメリカハイク協会ホームページでは“A haiku is a short poem that uses imagistic language to convey the essence of an experience of nature or the season intuitively linked to the human condition.”として、緩やかな定義を採用している。
- 3) 井尻 2011, 2012, 2013 参照。
- 4) 1992年スペイン語圏における日本文化研究・紹介を目的に、首都ブエノスアイレスと郊外のサン・イシドロの2か所を拠点として小林正直が設立した。1993年から隔年で〈日本語・日本文化会議〉

を開催し、「日本語の変化」「日本における漢字教育」「日本語・スペイン語比較研究」等をテーマとする言語分野、「日本の暦」「浮世絵」「茶道」「日本仏教」等を取り上げる文化・芸術分野、さらに「移民」「自殺」「終身雇用」「社会規範」等を対象とする社会分野など多様な研究発表やシンポジウムを行い、すでに8回目を終了し、研究発表はすべて冊子として出版している。2000年からは、やはり隔年で〈国際ハイク学会〉を開催し、ヨーロッパ、アメリカ、日本からの参加者が研究発表やシンポジウムを行い、昨年で7回目となっている

- 5) 前身の「西部クラブ」は1952年にブエノスアイレス州西部の日系人家族間で子弟に日本の言語、文化、習慣を身につけさせる必要から設立された。モロン市に所有する会館を拠点として、日本語学校と野球チームの運営のほか、文化活動として日本映画の上映、折り紙・生け花教室、漆芸指導が行われた。1990年に西部日本人会に名称が変更された
- 6) 今日までにスペイン語圏では日本の伝統詩歌の翻訳書、研究書が数多く出版されている。研究書としては、スペイン語圏初の俳句史・翻訳書であるロドリゲス＝イスキエルド『日本の俳句』(1972)、スペインにおけるハイク受容史であるアウジョン・デ・アロ『スペインにおけるハイク』(1985)、山崎宗鑑から現代まで105人の作家の注釈書、研究書であるシルバ『俳句の本』(2005)があり、翻訳書としては藤原定家から子規までを含めた『不滅の俳人たち』(1983)、心敬から現代俳句作家までを時代ごとに区分して取り上げた『瞬間－俳句新アンソロジー』、20世紀の女性作家3人の作品集『女性作家70句集』(2011)などの選集の他、『古今集』(2005)、『良寛99句』(2006)、『情熱の詩人－与謝野晶子』(2007)、『子規100句』(1996)、『水を味わう－種田山頭火』(2004)など多数出版されており、その序文の多くには万葉集から現代短歌、俳句、川柳にいたる日本の伝統詩歌の変遷について、季題や韻律を含めた丁寧な説明がある。
- 7) 現代の文学批評において、既存の権力構造や社会的ヒエラルキーを支持し、また支持されることによって、正典や規範として認められるようになったテキストを指す。日本文学におけるカノン化の問題については、『創造された古典』1999年参照。
- 8) ジュリア・クリステバによって1966年に用いられるようになった記号論の用語。個々のテキストを独立して捉えるのではなく、文学作品総体の構造の中で見ることをいう。創作にも受容にも関わる概念である。
- 9) 高松寿夫は、『万葉集』にも4～5世紀の仁徳天皇や雄略天皇の作品として和歌が収録されているが、これらは後世の仮託の作や伝承歌として除外する。一方、舒明天皇(在位629～641)の時代以後になると、継続的に作品が残っていることが確認できるとして、定型詩としての和歌の成立をほぼ舒明朝のころとしている(高松:82)。
- 10) 勅撰和歌集は、春夏秋冬から始まり、賀、離別、羈旅、物名、恋などの部から構成されている。
- 11) シラネは、人間が認識した自然とは、実際の環境ではなく、人間の自然に対する言説＝「二次的自然」であるとして分析し、脱構築しなければならないと提唱した。エコクリティシズムは、このような人間の作った自然と環境のギャップに着目する。「二次的自然」という用語は、H.D. ソローが用いた“second nature”から借用されている。
- 12) タットマン、C. は『日本人はどのように森をつくってきたのか』1998において大木を大量に消費した時期が二度あったことを指摘し、それぞれを「古代の略奪」(600～850年)と「近世の略奪」(1570～1670年)と名付けた。
- 13) 例えば、『骨董屋』(1841)の少女ネルと祖父の逃避行の場面では、急速な工業化による大気、土壌汚染など劣悪な環境が描写されている。
- 14) 第5回国際俳句学会記録論集所収。学会はブエノスアイレスで開催。和訳は筆者による。

参考文献

Shirane, Haruo. "Beyond the Haiku Moment: Basho, Buson, and Modern Haiku myths". *Modern Haiku*, XXXI:1 (winter-spring 2000).

- Higginson, William J.. 1996. *Haiku World*. Kodansha International.
- Mendiara, Neri L.. 1998. *Haiku*. Dunken.
- Mendiara, Neri L.. 2000. *Haiku II*. Dunken.
- Mendiara, Neri L.. 2008. *Haiku III*. Dunken.
- Mendiara, Neri L.. 2001. *Tanka*. Dunken.
- Mendiara, Neri L.. 2006. *Tanka II*. Dunken.
- Miyakawa et al. 2007. *Haiku-Tanka-Senryu 4a antologia*. De Los Cuatro Vientos.
- Tozai. 2010. *Haiku V. Material dek V Encuentro Internacional de Haiku*. Toza Ediciones.
- Tozai. 2012. *Haiku VI. Material dek V Encuentro Internacional de Haiku*. Toza Ediciones.
- 井尻香代子. 2011. 「アルゼンチンにおける日本の詩歌の受容について」. 京都産業大学論集人文科学系列第44号. pp.22-37.
- 井尻香代子. 2012. 「国際俳句と季語—アルゼンチン・ハイクをめぐって—」. 京都産業大学論集人文科学系列第45号. pp.315-331.
- 井尻香代子. 2013. 「スペイン語ハイクの韻律—アルゼンチン・ハイクの音声分析から—」. 京都産業大学論集人文科学系列第46号. pp.22-37.
- 稲畑汀子他監修. 2008. 『現代俳句大事典』. 三省堂.
- 小峯和明「南方熊楠と熊野世界」(『環境という視座—日本文学とエコクリティシズム—』渡辺憲司他編). 勉誠出版. pp.37-43.
- シラネ, ハルオ, 鈴木登美共編. 1999. 『創造された古典』新曜社.
- シラネ, ハルオ編. 2009. 『越境する日本文学研究—カノン形成・ジェンダー・メディア』勉誠出版.
- シラネ, ハルオ他編. 2012. 『世界へ開く和歌—言語・共同体・ジェンダー』勉誠出版.
- タットマン, C. 1998. 『日本人はどのように森をつくってきたのか』. 築地書館.
- 辻野亮. 「日本列島での人と自然のかかわりの歴史」pp.33-54. (2011. 『環境史とは何か』). 文一総合出版.
- 天満尚仁. 2011. 「日本文学における主体性—他者性としての「自然」(『環境という視座—日本文学とエコクリティシズム—』渡辺憲司他編). 勉誠出版. pp.99-07.
- 野田研一. 「二次自然と野生の自然」(『環境という視座—日本文学とエコクリティシズム—』渡辺憲司他編). 勉誠出版. pp.34-36.
- フリードマン, アビゲール. 2010. 『私の俳句修行』. 岩波書店.
- 正岡子規. 2002. 『俳句の出発』(中村草田男編). みすず書房.
- 松野弘. 2009. 『環境思想とは何か—環境主義からエコロジズムへ』. 筑摩書房.
- 矢原徹一. 「人類五万年の環境利用史と自然共生社会への教訓」pp.75-104. (2011. 『環境史とは何か』). 文一総合出版.
- 湯本貴和編. 2011. 『環境史とは何か』(シリーズ日本列島の三万五千年 1). 文一総合出版.

Diffusion of Haiku and change of perspectives

Kayoko IJIRI

Abstract

This study clarifies the reason for the national and global diffusion of Haiku in the last century through two approaches. The first approach centers on its formal brevity. Although Haiku was born out of modern occidental literature, it still maintains a feature of Haikai-Renga, called Hokku, through its extreme conciseness. This makes it possible to write Haiku poems in collaboration with members of a group. With this interactive feature Haiku changed the notion of individualism in modern literature.

The second approach examines the history of Japanese poetic forms and diffusion of Haiku from the perspectives of environmental history and ecocriticism. During various crises in the relationship between nature and human beings, Japanese poetry has changed its perspective on nature and thereby changing the language that expresses this perspective. This process gave rise to new poetic genres such as Renga, Haikai-Renga, and Haiku. Thus, the form and language of Haiku reflect the perspective on nature in Japan. In America and Europe, Haiku has been spread because of the emergence of environmental thoughts and ecology. Haiku in various languages expresses an interest in life in terms of biological and cultural diversities.

Keywords: Diffusion of Haiku, Change of perspectives, Interactive genre, Environmental history, Ecocriticism